

2014年12月26日掲載

「ほめない子育てで伸びる」

先月、札幌の中学校で「ほめない子育てで子どもは伸びる」をテーマに講演した。参加した保護者には「ほめる子育て」をしている人もいた。確かにその時は子どものやる気につながるが、それはいいことなのだろうか。

ほめられて育つと、ほめられたために必死でいい子を演じ、自分の意見を持たず大人の顔色を伺うようになる。大人になるとほめてくれる人がいなくなるため人の上に立てなくなり、一定の基準で育てられ評価されてきたので枠を超えられない人間になる危険性がある。

ほめるとは、「あなた」を「評価する」ことだ。「お手伝いしてくれていい子ね」。親がよく口にするほめ方だが、この裏には「お手伝いしなかったら悪い子」というメッセージも込められている。親が評価で子どもをコントロールしていると言えるのだ。

必要なのは、「私」が主語で気持ちを述べ、現実を「認める」ことである。「お手伝いしてくれたから、お母さんは本を読む時間が取れたの。助かったわ、ありがとう」。お手伝いしてくれたこと、本を読む時間が取れたこと、すべて現実である。その現実に対して「私はこう思う」のだから評価はない。「ほめる」と「認める」はまったく似て非なるもので、この違いが子どもを伸ばす鍵である。

どんな子どもも能力を持っている。親のちょっとした声掛けでその能力がどこまで引き出せるか変わってくる。私も常に意識し、よりよい声掛けをしていこうと思う。

(毎日新聞より)